

緑爽会会報 No. 172

2021年2月24日発行
日本山岳会 緑爽会
発行人 富澤克禮



デザイン・制作 関塚貞亨

〜〜 《メッセージ》 〜

緑爽会の活動状況等について

代表 富澤 克禮

緑爽会会員の皆様、如何お過ごしでしょうか。新しい年になり早くも2ヶ月が経過しようとしておりますが、昨年同様、本年もご協力の程よろしく御願い申し上げます。

新型コロナウイルス禍の第3波の中、11都府県に発令されました緊急事態宣言により、新規感染者等の数字は減少傾向を示しておりますが、まだまだ厳しい状況が続いており、緊急事態宣言は、10都府県では、3月7日まで延長されました。また、遅ればせながら、ようやく日本でもワクチンの接種が開始されようとしております。一方、開催が危ぶまれているオリンピック・パラリンピックは、組織委員会の森会長による女性蔑視発言で、会長人事問題が揺れております。さらに、2月13日には、東日本大震災の余震と云われる大きな地震があり驚きました。

このような混沌とした落ち着かない日々が続いておりますが、皆様におかれましては、御自身の工夫と努力で、お元気にお過ごしのことと推察致します。

緑爽会の活動につきましては、会報でもお知らせしておりますとおり、9月山行の高尾山・八十八大師巡り、10月の創立25周年記念講演会、11月山行「田部重治の足跡を辿る」は、予定通り実施出来ましたが、12月の忘年会、1月初詣山行の「高尾山・八十八大師巡りーその2」、2月か3月に予定しました芳賀孝郎さんのお話等は、コロナの第3波の影響により、残念ながら中止せざるを得なくなってしまいました。

今期最後の行事、3月山行「高尾山・八十八大師巡りーその2」についても、緊急事態宣言が解除され、無事実施できることを祈るのみです。

また、4月17日(土)に開催を予定しております総会につきましても、今後のコロナの状況によりましては、昨年同様、書面による総会になることが懸念されます。JAC120周年記念事業の「山岳古道調査」(1月号「山」同封資料を参照して下さい。)に、緑爽会としてどう取り組むか等についての検討の必要もあり、今年こそは、無事、開催されることを強く念じております。

「山岳古道調査」につき、ご意見等ありましたらお聞かせ下さい。

このような厳しい環境の中、会報については、2月号(No. 172)をお届けできますことを嬉しく思います。しかし、このような状況下では、上述のとおり例会が開催されず活動報告等もないことなどから、引き続き、皆様からの原稿をお待ちしております。皆で楽しい会報を作っていきたく思いますので、近況報告、随想等何でも結構ですのでお寄せください。

新型コロナ禍は、まだまだ厳しい状況が続くことが想定されますが、会員の皆様におかれましては、健康第一でお過ごし下さい。元気にお会いできる日が一日も早いことを期待しております。

老人と山登り—2019年の晩秋にて—

芳賀 孝郎

私は今年85歳になった。「老人の山登り」の老人は80歳以上の老人を指している。

50年以上も前、松方三郎先輩が日本山岳会の集会で「最近の会員は化石が多くなり、その化石が物申すので困る」と言って笑わせていた。この時代は現在の後期高齢者の会員を化石と称していたようだ。

松方先輩は1970年日本山岳会エベレスト隊総隊長（71歳）として、5350mのベースキャンプで指揮を執った。その後に体調を崩され、多くの足跡を残して、化石になる前の74歳で亡くなられた。

現在山岳会の平均年齢は70歳に近づいている。大勢の70歳以上の会員が活躍している。老人会員は80歳以上、化石会員は90歳以上と私は思う。85歳を過ぎると重い荷物は背負えない。即ち小屋泊、テント泊りは無理である。更に登る速度が遅くなり、下りも登る時間と同じになり、仲間に迷惑をかける。日帰り登山は8時間以上の行動は不可能になった。夏山の登りは3時間、冬山の登りは2時間が限界と私は決めている。

過去の私の登山は、困難な山登りに取り組み、それを克服していた。危険は避けるがその限界を追及していた。しかし老人の山登りは危険の分野が広がり、困難な山そのものが危険となっている。その認識が簡単にできないのが老人である。

私の登り方はポールを使って一歩一歩ゆっくり呼吸に合わせて登る。下りは両手のポールと2本脚を使い体重を分散させ、膝の負担を軽くするように努めている。私がポールを使用したのは60代からである。スイスのガイドから「末永く山登りを楽しむには膝を大事にする」ことを教えられ、ポールを使用するようになった。私の仲間には「ポールを使うと老人に見られる」と言って使用しない人もいる。私にとってポールは登山の必需品である。

私の登山道具は相変わらず古いものばかりである。靴はキャラバンシューズを履いている。もっとな軽く足にフィットした最新型のシューズを履くと登山は楽しくなり、行動範囲が広がると思うが実行しない。服装についても軽くてカラフルなものにしたい。若い登山者が着ている服装にしたいと心で思っているが購入せず、着慣れた古いものを着ている。これを如何に変えるか？ 私には格好良いウエアを着る若さがない。

いま考えると、学生時代（1954～1958年）私は山靴屋にビブラムソールのタウンシューズを注文して履き、ザックを背負って学校へ通った。ある時山岳部長から「学校へ来る時くらいはザックはやめるよう」に注意されたことがあった。そのタウンシューズはソールを張り替え現在も履いている。昔を振り返り、自分は早い時に流行の最先端を歩んでいたと自負する所が老人である。

80歳になると時々体調が変化するので自己管理しなければならない。やせ我慢をすることは禁物である。登山中に下山を宣言することは勇気が必要である。勇気こそが仲間に迷惑をかけない自己申告だと思ふ。

2年前、斜里岳へ行っった。沢から尾根に上がる途中で体調が悪くなった。仲間に迷惑をかけた下山した。その時、私の頭の中には過去に登った3月の斜里岳登山が浮かんだ。途中までスキーで登り、

その後アイゼンに履き替えての快適な登山が頭にあった。過去の登山経験が自己申告に迷いを生じさせる。老人の登山は、素直に仲間へ自己申告することが必要だ。

この頃300mの山を登ることも、1000mの山を登るのも同じように私は疲れる。近くの三角山(311m)には年間10回以上登っている。三角山登山は自分の体力測定場所になっている。私の家から登り50分、下り40分の登山である。三角山には私と同じように一人で登る人がかなり多い。特に中高年の女性が目立つようになった。

1970年代の元旦は毎年三角山へ家族登山をしていた。頂上に着いて見るとテントが張ってあった。ご来光を望む二人の青年がいた。彼らと正月の挨拶を交わし、そこで新年のお祝いの酒をご馳走になった。これが毎年の慣例となった。しかし10年後には正月登山者が多くなり、テントを張ることが出来なくなった。そして青年たちとも会えなくなってしまった。老人はいつも古いことを思い出す。

最近、体調により登る速さが異なる。血圧が低いと朝起きがきつく、身体が安定しない。脈拍数が50を切ると行動が遅くなる。体調を考えると登山は消極的になる。登山中に心臓がおかしくなった時はどうするか云々を考えると近くの低山歩きを続ける気持ちにさえならない。そこで今年は山スキーを楽しむことが出来るかと心配になる。

先日平和の滝からのルートで手稲山に登った。昔のコースが頭にあるので気楽に出かけた。この手稲山コースは600m付近からガレ場になり900mまで続き、しかも急斜面に苦しんだ。私には蓼科山や北八ヶ岳のようなガレ場の山は苦手である。今回苦勞して登り4時間、下り3時間を要した。しかし手稲山登山は自分のペースで歩いたので楽しかった。これで7・8時間は登れると自信になった。帰宅後、快適な疲労で心身共に爽快になり、久しぶりに満足した気持ちになった。

手稲山に続いて旧国鉄千歳線の跡、現在のサイクリングロード10.5kmを歩くスキー仲間と歩いた。2時間30分のウォーキングを楽しみながら、私の知らない200万人都市札幌郊外の発展ぶりを見ることができた。この歩きで足の裏に初めてマメができた。私の足はアスファルトの路に適さないのではないかと思った。

10月、私はJAC北海道支部の仲間と増毛山道からの浜益御殿と雄冬山を9時間かけて登頂した。これからカニサン岳の山行にも参加する予定である。

11月の好天には三角山から大倉山を経て小別沢峠への尾根道を歩くのを楽しみにしている。尾根道は枯葉の絨毯になる。枯葉を踏みしめながら、まもなく冬の季節が訪れる落葉した木々を見ながら散策する。この一年を振り返りながら今年も終わる。

山登りもウォーキングも長く楽しむことが出来るのは、学生時代に経験したオールラウンドの登山指導を受けたことと思う。先輩に感謝している。

札幌は老人登山と化石登山に恵まれた処であり、低山歩きを楽しめるところが多々ある。良い天候を選んで、良き仲間を誘い簡単に登山を楽しむことが出来る。登山は「個人的スポーツ」と言われている。即ち「自分が山に登りたい」の意思で決まる。登りたい気持ちが無くなる時登山は終了と思っている。静観的登山、精神的登山は私にとってはまだ先のことである。

いろいろ考えられるが、私の老人登山は良き仲間がいるお陰と思っている。化石になっても低い山に登り続けたい。

策ヶ岳考—策と淘籬・策籬—

南川 金一

南アルプス中部、早川の右岸に聳える策ヶ岳は個性的な山である。策を伏せたようなその山容から、早川流域の村では策ヶ岳と呼んだ。この山ほど、その形状と名前が一致する山も珍しい。標高2,629メートル。バスを降りた白石が450メートルだから、標高差2,200メートルに近く、簡単な山ではなかった。

策ヶ岳という名前とその存在を知ったのは、深田久弥の紀行文からだった。早川流域周辺の山からは、その特色ある形で、すぐに策ヶ岳と分かった。ぜひ登りに行きたいものだと考えながらも、深田久弥の紀行文から察するに手ごわそうな山であり、ためらいながらも機会をうかがった。深田久弥は「茂知君」こと望月さんと1月下旬に登り、新雪のラッセルに苦勞して途中で退却している。

策ヶ岳には2回登った。最初は1977年11月、古典的ルートともいべき保川を遡るルートだった。保川の谷奥の右俣と左俣の合流点から県境尾根まで標高差1,300メートルを登る大武刀尾根の途中でツェルトを張った。2回目は1986年8月、新倉から伝付峠へ上がり、県境尾根上の保利沢山の頂上を踏み、生木割、這松尾、策ヶ岳、布引山と歩いて老平へと降った。いずれも山中で誰にも会うことはなく、静かな山だった。したがって、山梨・静岡の県境稜線上の山ながら、策ヶ岳は山梨県の山であるという印象が強かったが、近年は大井川上流に静岡県側からのルートができて、そのルートから登る者が多いらしい。手元にある『静岡の百山』という本に策ヶ岳が紹介されているのはよいとして、「策」それはどこからつけられたのか定かではない。おそらく麓の集落からの形状からであろうとの説明がある。執筆者は静岡の人であり、山梨県の山や、車から降りて早川流域を歩いていないから、こんな間の抜けた話になるのである。

江戸時代文化年間に編纂された『甲斐国志』は山梨県地誌の基礎資料とされている。「山川部第十四 巨摩郡西河内領」の項に淘籬イザルガ岳という山が登場しており、「山形淘籬イザルヲ覆セタルガ如シ。因リテ名ズク。大中小三峰アリ。高山ナリ…」との説明がある。策ヶ岳のことである。「策」になぜ「淘籬」という難しい字を当てたのだろうか。大修館の大漢和辞典では「淘籬」は「米を磨ぐ策。こめあげざる」である。この言葉は他の漢和辞典には載っていない。大漢和辞典に日本語の読みがないのは日本語では使われないからであろう。中国語の発音の tao luo が載っている。右肩に2が付いているのは中国語の声調の第2声であることを示している。「淘」は「米をとぐ」であり、「籬」は「こめあげざる」である。ところが、角川の漢和中辞典には「籬＝といだ米を上げるもの。底が四角で、上が丸い」との説明とともに挿絵が載っている。(次頁参照) その説明と挿絵からすると、策ヶ岳の名前由来の策にはほど遠い物である。淘籬＝策ではないのである。

策が淘籬になったのはなぜだろうか。策ヶ岳を目にする早川中流域の村々では、「ざる」と呼び、文字にする必要がある場合には「ざる」「ザル」「策」が使われていたのだと思う。『甲斐国志』の編纂者は漢籍に明るく、淘籬は策であると考えて、策を淘籬に置き換えた

一 淘籬イザルガ嶽 保南畑、諸村ノ西ニ在リ山形淘籬イザルガヲ覆セタルガ如シ因テ名ツク大中小三峯アリ高山ナリ是亦御林山ニシテ東西三里南北貳里檜棧唐松比賣イザルガ雜木アリ此邊金坑多シ○保河内 淘籬イザルガ嶽ヨリ登ス又神長イザルガ澤北ヨリコレニ會ス○尾白川 谷澤原イザルガ深合ノ此川トナル又宇牟志澤中イザルガ數イザルガ深不動澤等ノ小溪皆ナ早川ニ注ク

⇒〔甲斐国志 山川部第十四 巨摩郡西河内領〕

【淘籬】27 tao² luo² 米を磨ぐ策。こめあげざる。

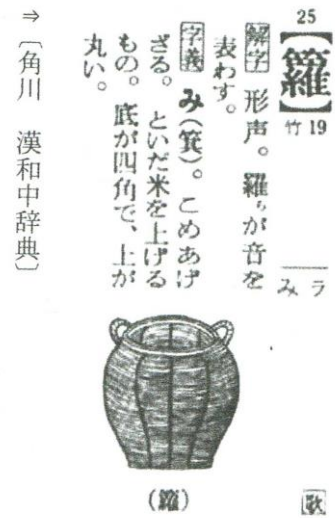
⇒〔大修館 大漢和辞典〕

のだと考える。しかし、淘籬の実物を見たことはなく、同じような形のものと思いこんでいたのではないだろうか。

「箒」は大漢和辞典に「割り竹で編んだ竹かご」とあり、「箒籬（ソウリ）＝ざる」という言葉が載っている。一方、1992年発行の中日辞典では「箒」が単音節で使われることはなく、「箒籬」と使われる。「箒籬＝針金や竹で編んだ網じゃくし、揚げざる。ゆでためんやワントンを鍋からすくい上げるのに用いる」と具体的な説明がある。この辞典は北京・商務印書館と小学館の共同編集というから、中国の日常を知る中国人の中国語研究者の知識が反映していると考えられる。すなわち、箒籬も箒ヶ岳の箒のイメージとは合致しないことになる。日本語では「ざる」「ザル」であり、それに見合う漢字として、いつの頃からか「箒」を使うようになった。しかし、箒の意味するところ・形状は日本と中国では異なるようだ。

『甲斐国志』の「大中小三峰アリ」という記述も気になる。

箒ヶ岳の頂上は二つのピークからなり、それぞれ「大箒」「子箒」と呼ばれている。普通3峰とは見ない。そこで、箒ヶ岳が写っている写真を探してみたところ、十谷峠から撮ったものに、東尾根上にずんぐりとしたピークが写っていた。このピークは東尾根の2,125m標高点のあるピークのような。無名のピークである。いままで気づかなかったが、写真をよく見ると、このピークも箒を伏せたように見える。大箒、子箒と、そのピークをもって「大中小三峰」としたのだろうか。北アルプスの劔北方稜線に「大窓」「小窓」「三ノ窓」がある。その呼び方に倣えば、「大箒」「小箒」「三ノ箒」となるのであろうか。



「大中小三峰アリ」とは大箒・小箒と左のピークか
(十谷峠から箒ヶ岳と東尾根を望む)

『山梨県市郡村誌』は明治26年の発行で、前書きに〈『甲斐国志』を補う意図による編纂〉とあり、村々についての記述は詳しく、山や川についても詳しいので、山の研究にも参考にした。南巨摩郡の都川村（草塩、京ヶ島、保、西之宮、黒桂の5村が明治7年合併）の項に「陶籬ヶ岳の嶺上ヲ以テ駿河国安倍郡ト国境ヲ劃ル」とあり、硯嶋村（雨畑、大嶋の2村が明治7年合併）の項には「陶籬ヶ岳」を解説して「西方は駿州阿部郡に属し…」とあって、これらはいずれも箒ヶ岳のことである。「陶」は「淘」の誤植であり、「籬」は「籬」の誤植である。箒ヶ岳を、わざわざ淘籬ヶ岳と書いたのは『甲斐国志』に倣ったのであろうが、日常使うことのない字であるから書き間違ったのか、活字がなくて印刷屋が近い字を拾って間に合わせたのか、誤植を校正時に見落とししたか、そのあたりは分からない。しかし、硯嶋村の項には「箒ヶ岳ノ山脈一派ハ…」との記述もあって、地元の村では箒ヶ岳と呼んでいたのである。

誤植というのは厄介なものである。「淘籬」の「淘」は「米をとぐ」のであるから斗（さんずい）

でなければならないし、「籬」は竹製品であるから^{^^}（たけかんむり）でなければならない。このような間違いが起きる原因の一つは、書き写す時の写し間違いがあり、もう一つは誤植を校正時に気づかないことである。明治時代の公式文書は罫紙に筆で書いたが、それまでに何度か元資料から書き写す過程がある。また、毛筆書きの文書を印刷に回す場合には、原稿用紙にリライトするから、その過程でも書き間違いが生ずる。『源氏物語』など昔の書物は、オリジナルはなく、後に書き写したものが現在に伝わっている。何種類か伝わっているものに相違点があるのは、書き写す時の書き間違いと説明されている。活版印刷は、植字工が原稿を見ながら、活字棚から鉛の活字を手で拾って一定の字数で組んでいくのであるが、目は原稿の文字を追いながら、活字のある場所に見当で腕を伸ばして目的の活字を拾ったつもりが実は隣の活字だったという場合がよくある。それをゲラ刷りで正すのが校正で、編集者の仕事だが、編集者も見落とすことがある。

『山梨県市郡村誌』は「山の研究にも参考にした」と前述したが、実は誤植が多いのには辟易とした。2万5千図を拡げて、山や川に関する記述を読み解き、明治時代の山（その内容には江戸時代の情報が反映している）と現在の山を対比してみた。説明文は漢字とカタカナで「、」「。」がなく、当て字が多い。読みにくいばかりでなく、方向を示す東西南北にも誤りと思われる記述が多いので、地図と合致せず疲れ果ててしまった。一例をあげれば、地形図上では南西に流れている川が、「南東ニ流レ」ているのである。そのうえ、「淘籬」のような言葉があり、さらには、それが誤植されているとあってはたまらない。

箒を調べてみると、「甲州ざる」が有名なのだと言う。水切れがよいのが好評で、インターネットには「山梨県スズ竹小ざる（米とぎざる、水切りざる） 特小・小・中3サイズセット 4,500円～5,800円。うどんざる・そばざる 小・中2サイズセット 3,000円～3,800円」とあり、一方、取次業者は「作り手である職人さんが高齢で年々減っています。そのため品切れになっています」と。箒など竹製品は、地の竹を用いて副業的に全国どこでも作られてきたから、材質や形は地域によって異なるであろう。箒ヶ岳山麓の早川流域の箒はどのようなものだったのか、その地域で育ったという女の人に聞いてみたが、竹で編んだ箒が使われていた時代は知らない、とのことだった。今や、郷土資料館へでも行かなければ、現物を見るのは難しいようだ。「甲州ざる」は富士山の2合目あたりのスズ竹を材料にしているもので、しなやかで香りがよく、網目が細かいので繊細でしっかりしているという。富士山の山麓でスズ竹に出合ったことはないが、箱根外輪山の一角でスズ竹の藪に入ってしまったって難儀したことがある。富士山麓のものも、それに近い性質なのではないかと思う。原料になるスズ竹が消えてしまうことはないだろうが、ビニール製の箒が100円ショップで買えるとあれば、手間ひまかけて編む箒は価格的に対抗できなくなる。

似たようなことで、ワラジの話。数年前まで日高の山へ行っていた。足は地下足袋なのでワラジを持参した。ワラジなどというものは日常使われることはないから、どこでも売っているものではなく、高田馬場のカモシカが沢登り用に扱っていた。前回行ったときには一足700円くらいだったものが1,000円になったという。「編むのを頼んでいる人が新潟の人で、藁の確保からしなければならぬので…」との話。「長く使えるように大事に履いてください」と言われて店を出た。機械化で、稲刈り時に稲藁から籾を落とし、稲藁は切り刻んで田圃に撒いてしまい、籾はライスセクターで乾燥するから、米づくり農家といえども稲藁は手元に残らない。日高の山中の沢で何人かに出会ったが、ワラジは私一人だけで、皆さんは「溪流靴」という近代兵器を使っていた。高価なワラジは、テント場での焚き火の灰になった。

（写真・画像提供：南川金一）

信濃の生んだ稀代の登山家 鵜殿正雄

小原 茂延

昨年7月に逝去された埼玉支部のT会員は忘れられない方である。故人との付き合いは短かったが、山岳全般とりわけ登山史・山岳地理等において濃密で肝胆相照らす仲であった。支部の同好会である「陸地測量部」は会員となつてすぐ所属を希望した。その例会の初日にT氏とお会いしたが、山のことは当然、「陸地測量部」の発会の主旨などを聴いて、日本山岳会の支部に山と地理学の同好の士を得たことに喜びを禁じ得なかった。

それから2年ほど経った頃、私が埼玉県川口市鳩ヶ谷の観音院に富士講の中興である小谷三志の墓があつて、日本で初めて当時女人禁制であつた富士山に高山たつ女を伴つた大先達だつたなどと話すと、彼は、その小谷三志の名に覚えがあると言う。日本山岳会の黎明期に日本アルプスの探検登山に活躍した鵜殿正雄に縁がある人物だと話し、後にその関係を示す上條武著「孤高の道しるべ」の抜粋コピーを送つてくれたことから、信濃の生んだ稀代の登山家、鵜殿正雄を知ることとなった。



鵜殿正雄

日本山岳会の草創期に小島烏水、高野鷹蔵、高頭仁兵衛ら発起人達による探検的な登山を行ったのは、越後の高頭を除けば東京や横浜の在住(高頭は東京にも住居所有)であつた。日本アルプスの地元である長野などは教職者の河野齡蔵、矢澤米三郎、志村烏嶺などが知られ、どちらかという植物調査や学校登山の奨励等に重きが置かれていた。

鵜殿正雄は明治10(1877)年に長野県小県郡長瀬村(現上田市長瀬)の庄屋池内家の三男として生まれた。父の市左衛門は山岳宗教不二教(富士講)の先達で、中信、東北信の信者を率いる中心人物であつた。前記武州の小谷三志の縁続きの鵜殿直記が池内家に立寄り、その人物に惚れ込んだ市左衛門が妹の“やそ”を嫁がせたのであるが、その直記が早世したために跡継ぎとして池内家の三男正雄が鵜殿姓を名乗ることになった。従つて生粋の信州人である。鵜殿は実家の池内家が時世の流れで衰退していったこともあり、農業に専念せざるを得ず苦学して木曾山林学校を終えた後、朝鮮に渡り、そこで日本山岳会に入会している。明治40年2月の山岳会会員名簿では418名の333番目にその名を連ねている。(因みに河野齡蔵、矢澤米三郎は337、339。当時ナンバー無し、大正9年からの新番号で鵜殿はNO.94)

日本に戻つた鵜殿正雄の探検登山は目を瞠るもので、日本山岳会百年史年表によれば、明治38年9月12日に鵜殿正雄ら：岳沢から前穂高岳に登頂(日本人初登頂)、明治42年8月15～16日 鵜殿正雄：前穂高岳～北穂高岳～槍ヶ岳(登山者として初縦走)、さらに明治45年8月13～14日 鵜殿正雄：天狗のコルから奥穂高岳往復、同コルから西穂高岳に初縦走を成し遂げ、在京の小島烏水ら山岳会幹部を唸らせた。鵜殿のこれらを含む探検登山の記録・考証は「山岳」の第5年から第16年迄、30篇近くが掲載されている。内容には彼の緻密な性格と科学的見解が窺える。このように鵜殿正雄の日本における近代登山に果たした役割は燦然たるものがあるが、地方だつたこともあり、現在までその名と業績を知る人が少ないことは惜しみあることと言わねばならない。

(写真は上條武著「孤高の道しるべ」より)

『その名はベント』後日談

夏原 寿一

『緑爽会会報』No. 146(2016年10月刊)に『その名はベント』と題した小文を投稿した。その記事が掲載されると、「値段は？」とか「体格に合わせて作ってもらったピッケルのサイズは？」などの問い合わせがあった。問いについては個々に答えたが、その時点で、それらを付記として加えた改訂版を作っておいた。その改訂版を昨秋、思い立って会報『山』に投稿した。



ここからが本題である。本稿が今後の『山』の発展を促す一つの方法となればと思ひ書き記す。

さて、上述の改訂版『その名はベント』は『山』No. 905(2020年10月号)の12~13頁に掲載された。しかし、それは会報編集委員によって手を加えられていて、私の意にそぐわないものになっている。そのことを担当委員に質した。その要旨を次に記そう。

なお、原稿は編集方針などにしたがって添削されることのあるのは承知している。

① 写真が掲載されていない：(拙稿には下の写真を貼付してあった)

写真不掲載については紙幅などの事情があったかとも思う。その場合は予め連絡いただければ何らかの対応策はあった。季節感のない記事なので、次号掲載でもよかった。

また、「ベント」の何たるかを知らないであろう山歴の浅い会員にも、写真を載せることによって記事に目を留めてもらえるのではとの期待感もあった。



② 通貨の表記が書き換えられている：

拙稿の「120 スイスフラン」が、『山』では「120 CHF (スイスフラン)」と書き換えられている。馴染みのない「CHF」なる通貨コードを原文に加え、それがために「CHF」が「スイスフラン」であることを示すのにわざわざ丸括弧で「(スイスフラン)」と注記している。どこにその必要があるのか、「120 スイスフラン」では何がいけないのか。

*「CHF」について、貿易会社に勤務経験のある友人に尋ねたところ、「これは通貨コードといって外国為替の取引などには使うが、我々の普段の買い物などには使わない」とのことだった。そのとおりで、このピッケルの労をとってくれたスイス人からの手紙には“120 sFr”となっている。

上述の問い合わせをしてから1週間ほど待ったが回答が来なかったので再度メールをしたところ、それから10日ほどたってから下記の回答が来た。回答をそのまま転載する。

夏原注： 転載にあたり、担当委員の氏名を「○」で表記した。要所に下線を引いた。

夏原様

会報編集委員会の○○○でございます。

このたびは、会報 10 月号の「東西南北」欄夏原様執筆の原稿の整理についてのご下問をいただきました。恐縮しております。

写真についてはご指摘どうり、スペースの関係上割愛させていただきました。しかしながら、本稿のテーマに則するならば写真は付すべきと考えます。

これに関しては夏原様がおっしゃるとおり、ご相談させていただくべきであったと思います。お詫びいたします。

また、通貨の表記については、当委員会の用字・用語に則ってあの形となりました。ご理解を賜れば幸甚に存じます。

さらに、11 月号の編集等でご連絡遅れましたこと重ねてお詫び申し上げます。

会報編集委員会 ○○○

・下線部分について：

- ① 写真について「本稿のテーマに則するならば写真は付すべき…」と考えているのに掲載しなかったとは、理解に苦しむ。
- ② 通貨の表記については「当委員会の用字・用語に則って…」とあるので、当該部分のスクリーン画像を送ってほしいとメールした。その理由は、委員会の用語集が「CHF」という特殊な用語にまで及んでいることに興味を持ったことに加えて、若干の疑念を抱いたからでもある。

スクリーン画像がなかなか送られて来ないので、それから 2 度、送ってほしい旨メールを送った。2 度目のメールには、私が参考に行っている（文章作成のバイブルと称される共同通信社刊の『記者ハンドブック』の当該部分のスクリーン画像を添付した。それには「スイス・フラン」、「スイスㇿ」とある。

しかしその後、何の音沙汰もないままに現在に至っている。

担当委員は「この回答で幕を引こうと思ったが、そうは問屋が卸さなかった」という状況になって、返答に窮しているのではと推測している。

・おわりに：

以前、私が「緑爽会会報」を担当することになったとき、その第 1 作 (No. 138) の編集後記に次のような一文を書いて方針を示した。

原稿には、文字変換の際の誤りと思しきものがごく稀にある。これらは修正していきたい。一方、いわゆる校閲に属する部分については原則として手を加えない。文言のひとつひとつに筆者の思いが詰まっていると考えるからである。

会報の記事は、山行報告なども含めてエッセイの趣がある。私は、それらを筆者の個性の表現と捉えている。従って、そこに書かれている筆者の思いはそのまま載せるべきと考える。

日本山岳会の機関誌である会報『山』は、山岳界の宝として今後とも伝えられていく資料の山である。会員に対して、もう少し納得のいく対応をしてほしかったと思っている。

日本100名山・300名山・200名山

吉田 理一

数字を並べる時は100・200・300と昇順に書くのが通常である。タイトルをあえて100・300・200としたのはそれぞれの名山が選定された順番によるからである。

「日本200名山」にあつて「日本三百名山」に無い山が一座だけあり、それが新潟県の荒沢岳である、という事は知っていたがその選定過程・理由等は深く考えたことはなかった。

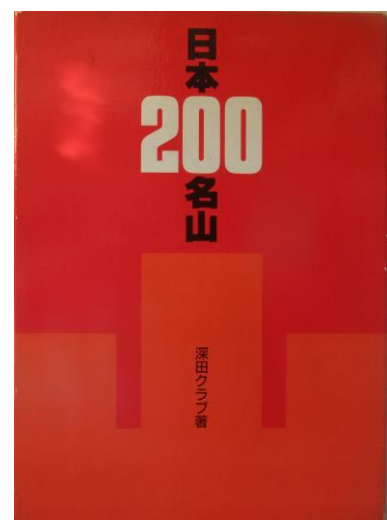
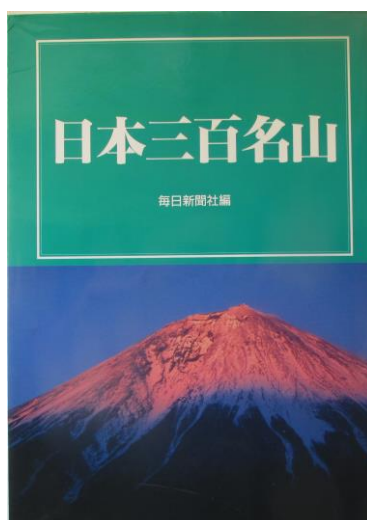
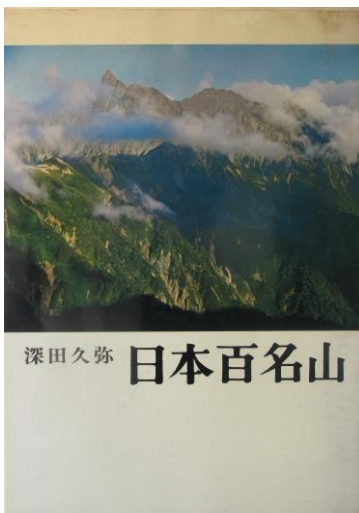
1. 『日本百名山』は、文筆家（小説家のち随筆家）で登山家だった深田久弥が、実際に登頂し日本の各地の山から定めた基準で100座を選び主題とした山岳随筆集である。初刊は1964（昭和39）年7月に新潮社から出版。第16回読売文学賞（評論・伝記賞）を受賞した。後に文庫版も発行された。この本がきっかけとなって百名山ブームが起こり、全山踏破を目指す山好きが百の頂に押し掛けたことはご存知の通りである。

2. 『日本三百名山』は日本山岳会編纂の昭和53年版「山日記」で発表されたものである。選定の経緯は会報「山」382号(昭和52年4月号)で当時の山日記編集委員会の担当理事である皆川完一氏が詳しく解説されている。以後、山と溪谷社で3分冊として発刊されている。最近では平成14年に新版が発行されており記憶も新しく、保有している会員も多いと思う。

3. 『日本200名山』は、深田クラブによって、クラブ創立10周年を記念して1984（昭和59）年に選定された日本の代表的な200の山である。1987（昭和62）年に昭文社から発刊された。

この本のあとがきに「～新潟県の荒沢岳は、アンケートの支持は少なかったが、近くの銀山湖から仰ぐ山容は一級品であるとして、あえて選定した。～編集委員の小倉厚・鈴木孝氏にお礼申し上げたい。（編著者深田クラブ代表 北村武彦）」とある。

※ちなみに本書で荒沢岳を執筆されているのは緑爽会の高辻兼輔氏である。



※1997（平成9）年発行の毎日新聞社編「日本三百名山」（毎日新聞社刊）には荒沢岳を含めた301座が紹介されている。

200名山・三百名山選定にあたり重要な役割を担った次のお二人は何れも私と同郷の新潟県魚沼地方のご出身である。「山」382号によれば三百名山の原案には荒沢岳も未丈ヶ岳も入っているが、2座とも私の在住している魚沼市の山である。

また、同じく「山」382号によれば、全国の岳人にアンケートを実施し、三百名山(案)から削除せよという意見のあった山には*印を付けてある。未丈ヶ岳には*印が付いているが荒沢岳には付いていない。最終的に何故選定されなかったのだろうか。

一方、深田クラブの200名山選定にあたり、アンケートの支持は少なかった荒沢岳が何故選定されたのか、お二人の果たした役割を是非知りたいものである。

- 皆川完一 氏 (会員番号2844番) 小出町 (現魚沼市) 出身
会報「山」編集人 第456号 (昭和58年) ~ 第465号 (昭和59年)
- 小倉 厚 氏 (会員番号5709番) 六日町 (現南魚沼市) 出身
会報「山」編集人 第529号 (平成元年) ~ 第577号 (平成5年)

皆川氏の生家は拙宅と数百メートルのところにあるが生前お会いする機会は無かった。

小倉氏は緑爽会例会で何度もお目にかかったのにこの件についてお話を伺わなかったのは今となっては残念に思う。 (写真提供：吉田理一)



銀山湖からの荒沢岳



雪の未丈ヶ岳

~~ 《予告など》 ~~~~~

3月山行 「高尾山八十八大師巡りーその2 結願」

9月の八十八大師巡りで回り切れなかった七十六番以降八十七番までを巡り、薬王院で巡拝証を受けます。初詣山行にスライドしましたが、それも中止としましたので、三度目の正直で実施したいものです。もちろん、前回参加できなかった方もご参加いただけます。

期 日：2021年3月18日 (木)

集 合：JR 高尾駅北口に9時

コース：高尾駅北口→落合→金毘羅台→1号路→薬王院→高尾山頂→
3号路・1号路で下山

ケーブルでの下山もできます。歩行時間：休憩込み約5時間

担 当：CL 荒井正人 SL 小林敏博

申 込：3月11日 (木) までに荒井へ

※当日の天気予報が思わしくない時は実施可否を決定の上、連絡を入れます。



※2月に芳賀会員によるお話を予定しておりましたが、「山好きの山の絵展」が中止となったことなどにより、スケジュール調整が出来ず、今のところ時期を見て開催という状況となっています。

2021年度総会：4月17日（土） 14時～ 集会室を予定

日本山岳会のコロナ対策によりルームの使用が制限されており、この会報発行日現在、今後については未定という状態です。上記の通り予定しておりますが具体的にご案内が出来ない状況です。従って、昨年のような書面による形とせざるを得ない可能性が高く、その場合はメール等でお知らせしますので、お含みおき願います。

120周年記念事業「山岳古道調査」（会報「山」908号同封の資料を参照ください）

日本山岳会は2025年に創立120年を迎えますが、この記念事業として全国の山岳古道調査を行うこととなりました。この事業の進め方は、①会員個人、同好会、支部などの単位で古道を推薦する ②その中からプロジェクトチームで調査対象の120の古道を選ぶ ③プロジェクトチームが委託した支部や会員有志が中心となって調査を行う ④調査状況や結果はホームページで掲載する。また、書籍として発行する、といった流れです。

緑爽会会員のうち3名の方が、このプロジェクトチームのメンバーとなっており、会としてどのように取り組むのかの方針を決めて、総会で諮ることとしています。支部に所属されている方には支部からも推薦要請があることと思います。その辺の兼ね合いもあり緑爽会としてのスタンスを決めることが求められると考えています。

※前号の訂正

171号、8ページ下から8行目「西堀栄三郎（元会長・第1次南極観測隊々長）」とあるのは「元会長・第1次南極観測隊越冬隊長」の誤りでした。お詫びして訂正させていただきます。

会費納入の件

現在、今年度会費未納の会員が5名おられます。つきましては年度末決算の関係もあり、3月初旬までには以下の口座へ会費<1500円>を「振込」にて納入していただくよう宜しくお願いいたします。

- ・ゆうちょ銀行からの振り込み 10000-18539041 「リョクソウカイ」
- ・他の金融機関からの振り込み 008-1853904 「リョクソウカイ」

※他の金融機関からの場合「支店名」は「ゼロゼロハチ」と入力してください。

----- **編集後記** -----

活動が出来ないこの時期、報告事項が無い会報となりましたが、それにも関わらず12ページとなりました。書いていただける会員があればこそですが、これが緑爽会の緑爽会たる所以かと思えます。

この3月21日は、深田久弥が茅ヶ岳で亡くなって50年となります。当会にはご子息・森太郎さんも会員としておられます。そんな時期に吉田さんが、『日本百名山』など著作に関して、また荒沢岳・未丈ヶ岳の選考過程に関して、一文を寄せてくださいました。私事ですが、200名山を登り終えた最後の山は能郷白山です。百名山選定の場面で候補に挙がるも結果的に荒島岳が選ばれましたが、何故だろうと思って登りました。それだけに荒沢岳・未丈ヶ岳の選定プロセスも大変興味のあるところでした。百、二百に限らず、枠を設けた場合には、どうしてもこうしたことが起こりますね。

コロナはまだまだ安心できません。お気を付けてください。（荒井正人）

次号予告<4月26日発行の主な内容（予定）> 3月山行報告、4月総会速報等皆様からの投稿をお待ちしています。引き続きよろしく願いいたします。